



想

随

と仰せられたりけるを……(徒然草)

○岩倉の狂女恋せよ子規(蕪村集) 等

大原

○(女院ハ)文治元年長月の末に彼の寂光院へ入らせ給ふ道すがら四方の梢の色々なるを御覧じすぎさせ給ふ程に山かげなればにや日も既にくれかりぬ。

(平家物語)

等

芦生

○教へる人に習ふ子の中に交る菅秀才。武部源藏夫婦の者いたはり傳き、我子ぞと。人目に見せて片山家。芦生の里へ所替。

(菅原伝授手習鑑)

賀茂(上賀茂・下鴨)

○(賀茂建角身命ハ)言ひ給ひしく「狭小さくあれども石川の清川なり」とのり給ひき。仍りて名付けて石川の瀬見の小川と曰ふ。その川より上りまして久我の国の北の山基に定まりましき。その時より名付けて賀茂と曰ふ。

(風土記逸文「山城」)

○いつしかもいつしかもとぞ待ちわたる森のこまより光り見むまを  
(かげろう日記)

○御被川水も緑の山かげの賀茂の宮居の御手洗川に映る面影  
(謡曲 水無月歌)

○下上の賀茂はいづれがみおやぞと禰宜にたづねて紉べらなり  
(徳和歌後万載集)

わが同志社高等学校国語科は湯口先生をそのスタッフの一員としてお迎えした当初、文学探訪を主催したことがある。教職員生徒の希望者をバスにのせて奈良方面をまわったのだが、その時の資料に文学探訪地図なるものを湯口先生が作成された。三色の地図で関係記事は赤で刷られていた。これは一目で場所と文学記事が把握できるので、大変な好評を得たものである。

奈良方面の文学地図が機縁となつて、国語科では、京都の文学地図を作ろうではないかという話を持ち上がった。幸か不幸か(？)私学協会を通じて振興会から助成金もおり、いよいよ昨年暮ごろから仕事に

## 文学地図を

つくつてゐる

下村 福

岩倉

○動きなきいはくら山に君が代を運びおきつつ千世をこそつめ  
(拾遺集 説人知らず)

○ほととぎすきき給へるととひて心みられけるに……岩倉にてきき候ひしやらん

着手した。それは、大体、高校上級生、大  
学教養課程の学生、あるいは一般知識人な  
どを対象としようということで進められた  
あった。

さて、ここに列挙した例文は地図に書き  
こむ予定の文章の見本である。単なる見本  
であって、拔萃の基準というものは何もな  
いので御承知願いたい。そして、これらは  
我々が仲よく各時代を分担して書き抜いた  
約一四〇〇枚という資料のほんの一部とい  
うことになるわけである。

ここまで仕事がかどったので、これか  
らは、書きこみの天才である湯口先生お一  
人の活躍を待つところとなった。従って文  
学地図として登場するのもそう遠い日のこ  
とではない。

勿論、地図に記載される分は全資料の一  
部であって、記載できぬ分も資料として大  
切に保存する予定である。また、今回は近  
世以前が対象であるので、将来近代も扱  
いたい気持でいることもつけ加えておきた  
い。

すぐ大方の御利用に供しうのかどうか  
は断言できないが、本校の生徒などは先ず

恩恵に浴することであろうし、やがては、  
生きた教材、生きた文学資料として、学生  
生徒、教員のみならず、ひろく世に益し  
することもあろうかと一同大いに自負して  
いる。

映画の予告篇のようで、とんだ随想と相  
なったが、愛するわが校の宣伝をあえてさ  
せていただいた次第である。

(高校教諭・国語)

## 大学の感想

小橋 一郎

同志社大学へ来て三年に満たない。同志  
社を語る資格には乏しいが、なにがしかの  
感想はある。同志社は良い所である。明る  
く、楽しく、美しい。公の席上では同志社  
の誇りが高らかに奏でられるのに、個人的  
には同志社の欠点を強調し卑下せられる先  
輩や同僚が少なくない。その欠点は、日本  
の多くの大学に多かれ少なかれみられる共

通の欠点であることが多い。これに反し  
同志社の長所はしばしば、同志社に特有の  
ものである。ただ長所は、時に欠点となる  
要因を含みかねない。

同志社は明るい。誰にでも何でもいえる  
し、主任教授の意を損ねると昇進がおぼつ  
かず、放り出されるようなこともない。し  
かしそのことは、組織を無視して勝手なこ  
とをいい、あるいはエスカレーター式の昇  
進に馴れて研究が甘くなるおそれを含む。

同志社は楽しい。誰もが親しみ易い。官  
僚的な冷たさがなく、家族的な温さがただ  
よっている。しかし楽しさに溺れると、外  
界へ出るのが臆却になって視野が狭くな  
り、些細なことが感情のもつれを誘発し、  
馬鹿馬鹿しい不和を招くことにもなる。切  
磋琢磨よりもかばいあい徳と感ぜられ、  
友人の結婚を祝うことの方が研究活動より  
も重大なことになってしまふ。

同志社は美しい。大学を訪れる知人は、  
誰もが緑の多い、とりどりの建物の散在す  
る風景に感動する。他大学にいる友人が、  
会館の立派さに驚歎したが、しかしこの建  
物に入っているのは勉強しようという気には

ならないねといった。美しいことは、この上なくいいことである。ただ美しさは人の心を酔わせることがある。大学者の書齋が意外に粗末であり、立派な書齋をもった教授が一向に勉強しないという例は、よくある。学問は頭脳によって研究されるものであり、講義はその深みによって優劣が決まる。

同志社大学は、何よりもまずすぐれた大学でなければならぬ。大学の価値を究局的に決定するものは、教授陣容である。すぐれた学者が沢山いることが、すぐれた大学であるための決定的要因である。その要因がどれだけ整っているかを、世間はよく知っている。どんな時代になっても、すぐれた学者を慕って学生が殺到する。設備の不足など大した問題でなくなりさえする。すぐれた学者は、専門の恐ろしさを知り、自己の専門を大切にし、他の専門を尊重する。すぐれた学者は、広い視野をもち、悠然として人生に処する。今の同志社大学にすぐれた学者がいまいけないのではない。もっとその数を増やさなければならぬ。われわれ自身が高まること、若き研究者の

才能を育て伸ばすこと、他からすぐれた学者を招くことが必要である。その上に同志社の明るさ、楽しさ、美しさが重なって、わが同志社大学はその輝かしい姿を誇ることができる。

危機だといわれる。危機を招いているとすれば、その原因は所詮人の心でしかない。各人が大学の本質に徹すれば、同志社の伝統はいやが上にも光を増すのである。

(法学部教授・商法)

## 安芸城址を訪ねて

西尾 牧夫

南国の桜が散り初めた四月上旬の一日、私は長い間幻にえがいた祖先発祥の地安芸を訪ねた。四国、土佐の安芸市である。江戸時代は高知の山内藩家中で高知市街に住んでいたが、それ以前、安芸氏、長曾我部氏の古い時代は長くこの地に住んでいた。高知市を大きく彎曲して東南に下ると、

野市、古川、赤岡の辺り、今も石畳みの郷士の旧宅らしい家が点在し、小さい城の面影を残している。赤野、八流れ附近の静かな海岸は黒い砂浜が遠く柔かい線を曳き、防風林の松林の中に古い墓石が累々と見渡す限り尽きない景観である。幾重にもたたんだような山なみの間に、ここばかり見事にひらけた平野は、二筋の大きい河川と共に安芸の街並を長らく支えた源動力であったのであろう。

土居廓中とけちゅうは全国三個所しか現存していないと称せられる武家屋敷群で、数十軒殆んど昔のままの姿である。五藤、中島、森沢等の標札があつた。狭い道幅も数百年の昔を偲ばせ、築地の蔭から今にも馬をひいた武士があらわれそうなただずまいである。廓中の中心に古城址がある。青い水を溢れた内堀で囲まれた城内には、幕末時代の城主、五藤氏ゆかりの人々が現在、留守居していた。案内を乞うて邸内のあちこちを歩き廻った。雨上りの柔らかな草叢の間を白いたんぼの花が靴先きにゆれる。私はふと、土佐軍記を想い出した。戦国の世、備後守、安芸元親、元泰、国虎等の武将が代

々守護としてこの地に采配を奮っていた。永禄八年、国虎、兵三千をひきいて岡豊の長曾我部元親を攻めたが、勝てず、却って永禄十二年長曾我部の大軍を受けて、遂に城が亡びたのであった。安芸城から八流山まで一里の間「伏屍、算を乱し、死するもの三百余」と今も八流崩れの名を留めている。

城が陥いる時、国虎に殉死した有沢石見や黒岩越前等の忠臣の名と共に敵に間道を教えた小谷四郎右衛門や井戸に毒物を投入して、主人を裏切った横山民部の悲話も残っている。(漫画家の横山隆一氏は先年この地を訪ねられてこの跡を弔われたとの話であった)

五藤家ゆかりの人々の案内で私はその井戸を探した。雑草のしげみの中に方三尺の古井戸が姿もなく埋没している。戦記に名高いこの井戸は、それでも無くなりもしないで、タープ視されてか、三百年を生きてきたのであるろうか。「国虎これまでと覚悟して、室、一条氏を幡多に送って自殺す」と。この井戸に投ぜられた毒であった。背後の丘に登って遠望すると菩提所であ

る浄貞寺辺りの山が、はるかに青く煙っていた。この附近を意味もなく、西に東に走っていた甲冑姿の若者共の息づかいが偲ばれる。時代は遠いが、しかし血のつながっている祖先の風景なのだ——等とそれはなつかしい、空想の旅であった。

(昭九大英卒・神戸商船大学教授)

## 堀貞一先生を偲ぶ

西脇 勉

私が同志社に在学したのは、昭和十年四月から昭和十六年三月にいたる六年間だった。いわば日本の歴史が急転回しつつあるさ中であった。多くの先生からさまざまな薫陶を頂いたわけだが、とりわけ堀貞一先生への追憶はつきない。

予科一年に入學すると同時に学友会弁論部に入部した私は、早々に早稲田との交換弁論大会に登壇した。「新島襄先生と日本精神」これが私の演題だった。十五分くら

いの短い演説だったが私なりの所信を披瀝した。ところが聴衆の一人として会場におられた堀先生は私が演説を終えて降壇するや直ちにつかつかと歩み寄って来られ固い固い握手をして下さった。入学早々のフレッシュマン、予科ボーイの私にとつてそれは大いなる感激だった。このようにして堀先生と私の最初の交わりがなされた。

その年の冬、盲腸炎のため府立医大病院に入院して間もないある寒冷の日、突如先生は御老体の身を濃い灰色のオーバーにつつま、ステッキをつきながらわざわざ病室まで見舞って下さった。「君、早く切って貰い給え。その方が楽になるぞ。」と励まして下さった。いかにも堀先生らしいお見舞いの言葉だったが、今なおその慈愛に満ちた声が耳に残っている。

チャペルその他の機会によく聞かされた新島先生、自責の場面のお話は、けだし先生の数多い訓話中、最も庄感に満ちたものだったろう。この時ばかりは全く無我夢中で語られた。左肩と左足を前につき出して顔をいささか硬直させながら声もややふるえ気味だった。後刻波多野神学部事務長

から伺った話であるが先生の左肩と左足を前につきだした説教中の独特な姿勢は先生若かりし日、丹波亀山藩時代にはげまされた槍の操法の型の名残りとか、どこか武士の面影の偲ばれる先生であった。

昭和十二年秋、一部右翼学生によるチャペル籠城に始まるスト事件の際の先生の沈痛な面持ちは怒りとも憐れみともつかぬ複雑なものであった。おそらく祈りに充ちた悲しみをただよわせておられたのであろう。

牧野虎次先生が総長事務取扱に就任され、グラウンドで男子学生に対し就任のこゝとばをのべられたのはたしか昭和十三年の秋だったと思う。式が終った直後、堀先生にお会いしたので「新総長の就任の辞はすばらしかったですね。」と申し上げたところ、「ウン。牧野という男はなかなか気の利いた男じゃろ」といわれた。簡明直截に、総長牧野虎次観を一学生に語られるところに先生の面目躍如たるものを感じた。昭和十八年七月、北支戦線にあった私の許に届けられた先生からの最後の書簡は次ごときのものであった。

「三月病臥以来老齡のため今日にては衰弱甚だしくあるいはこの書は最後のものならん。同志社精神を以てお国のため御献身祈り上げ候。八十三才の老齡なれば諸君のため祈るべし云々。」

復員の際、辛うじてもち帰ったこの貴重なはがきを私は今もなお大切に保管している。

（昭和十六年大神卒・四国学院大学教授）

### ある臨終者の受洗

松好貞夫

五月八日の朝の五時すぎ、家内に起こされた。お隣りのご主人がもう駄目らしいので、せめて教会の牧師さんにお祈りだけでもして頂きたいからと、奥さんが相談に來られたという。とび起きてすぐ近所の玉川平安教会に電話した。その田口重良牧師は同志社時代からの親友である。大急ぎで駆けつけて呉れた。

今臨終のその人は元來が無宗教論者で、死ねばどこかで焼いて捨てろと、口癖に言っていたそうであるが、そうはできない。家族の人たちがすすり泣く中で、田口牧師は聖書の詩篇を引いて、厳かに祈りを捧げられた。息の詰る厳肅な一瞬であった刹那に、奥さんから洗札を受けさせたいと、切々願ひ出があった。田口牧師は快く承諾されて、ただちに準備にとりかかった。

「主よみもとに近づかん」、ささやかに流れる讚美歌に送られて、その人はなんの苦惱もなく、静かに昇天して行った。私はその栄光に満ちた絶対者への復活と、それにも増して家族の人々の安堵し切ったまなざしを、忘れることができない。その人、それは私たち夫妻が八年余世話になっている家のご主人、苔米地俊之氏なのである。

苔米地さんは実にやさしく、行き届いて私たちの面倒をみて下さった。しかし自己並びにご家族には実に厳格であった。曾て芥川龍之介の茶毘に立ち会われた恒藤恭先生が、芥川はこれですっぱりしちゃったと言うのであろうと、なにかで書いておられたのを記憶する。かれの作品に描かれた深

刻な人間の苦惱を思うにつけ、その死には無限の意義と価値が秘められたのかも知れない。親交のあった恒藤先生はよくそれを汲み取っておられたのであろう。私は苦米地さんの生前を追想して、ふとそのことを思い出した。人はみな十字架を負っている。芥川は生の苦痛に堪えかねて、ついに死を選んだ。苦米地さんは、自己を持するに、余りにも冷厳であつて、病気に倒れてからも、家族の手を煩すのを頑強に拒まれた。人それぞれの負う十字架があつたのにちがいない。まさに臨終の刹那に田口牧師の洗礼を受け、安らかに昇天する枕頭に待して、私たちは十字架から解放された苦米地さんに、しみじみと死の栄光を感じ、ご遺族の人々ともども、田口牧師の労に心から謝したことである。同志社に学んだ幸いについてと同じように。

告別式は五月十四日、玉川平安教会で行われた。花が好きだった故人の遺影が白いバラ、百合、菊、カーネーションの花で埋められ、会堂は献花の人で立錫の余地もなかった。

(大四大法卒・東京都立大名警教授)

## 石

### 上野いと子

急流木曾の河口の石はすべてなめらかな丸みをおびている。あの奔流を互に「ぶっかりあい、すれあい、上下動左右動、ずいぶん激動しつづつ流れ走るうちに角がとれたのである。自然にできた丸みであるから、実にきめがこまかくて味が深い石工のみでは到底かような味はでない。私はこの石を木曾みやげにもらつて大そう感心した。人格に丸みができるまでの人間修業も実に容易ではない。

急流にある大石は上流に進む。強い水勢が石にぶつかつて底をえぐる。刻々にえぐりえぐっているうちに、ついに大きな穴ができるので、大石はごろりと穴にたおれかかる。かくしつづつ徐々に上流に移行するのである。

浮草のように流れのままに動く人と、確固たる定見をもって風潮におし流されぬ大石の人物とを思う。

人間の数と石の数とは非常に多い。しかしけ高い信仰と明澄な良心とに生きる人は大そう少なく、またすばらしい庭石となる石も至極少ないそうである。

よいおしめりを草木が喜ぶと同様に石も喜ぶ。水を十分に汲うた雨上りの石の潑刺たる新鮮さノ艶やかなうるおいノ石も生きている。時々水を飲まさねば可哀そうである。

来客を迎える時、玄関の敷石に打水、草木にも庭石にも十分水を注いで生き生きした喜びを家全体にみなぎらせる。

昔むした石とうろの平をめでつづつ来客互に心おきなく語りあう閑日は大そう好ましい。お床に名香くゆらば一人であるう。

(『野草の香』より)

(女子中高教諭)